

# 女子と 作文・ 主婦 と労働

トークイベント <http://nishioji-bookmark.org/>

出演＝

近代ナリコ  
村上潔

日時＝2014年1月26日(日)

16:30開場 17:00開演

会場＝今野スタジオマーレ

東京都杉並区松庵3-41-1

料金＝1500円 定員＝30名

第76回西荻ブックマーク

# 主婦の割り切れなさ

## 向き合おう

村上潔

幼い頃、平日の午後には『3時にあいましょう』(TBS)・『3時のあなた』(フジテレビ)をよく観ていた。少し奇妙な「女」の位置どり、そして歪んだ《おんな》への視線から醸し出される怪しげな場の空気と浅く淫靡な趣向は、受け入れやすかった。土曜のお昼は「独占/女の60分」(テレビ朝日)。あっけらかんとした、雑食性のある女たちの世界が楽しかった。

もう少し大きくなると、『傑作ワイド劇場』(テレビ朝日)で『月曜ワイド劇場』や『土曜ワイド劇場』の再放送を楽しんでいた。夕方の西日が射す部屋のテレビ画面で観た、まったく同じように西日が射す部屋で絶望の表情を浮かべて赤子を抱く主婦役の中井貴恵の佇まい(「嫁と姑・泥沼のたたかい」【月曜ワイド劇場、1984年】)は、いまでも強く印象に残っている。

当時は、そうしたテレビを観る時間の過ぎしかたや、そこで享受する世界の価値観を、世の中の「ふつう」だと、まったく自然に思っていた。自分は大人になってもずっとそうした世界のなかを、このような感覚で、生きて

いくのだろうと思っていた。だから、ある意味で私は「主婦」として育ったのかもしれない。

さて、主婦のおもしろさは、その立場性や生活・労働の割り切れなさにある。一人の男性において、「労働者」と「父親」は割り切れる。しかし、「主婦」と「母親」は割り切れない。「キャリア女性」にはオンとオフがあるが、「主婦パート」は地続きである。それこそが《主婦性》であり、《主婦の状況》である。私は、男性として育ったが、むしろ、主婦のその割り切れない状態や感覚をこそ「ふつう」だと感じていたし、ずっと、それを居心地のよい状態・感覚だと捉えていた。

もちろん、私が本当の主婦的な立場にあつたとしたら、そんな悠長なことは言っていない。そんなかったら、そんな悠長なことは言っていない。主婦としての生きかたや、主婦パートのような労働で、「成人男性として」生きていけるのかといったら、それは昔もいまでもとつもなく困難なことである。「私は主婦的な生活・労働を望む。それでいい」と開き直る勇氣も、

幸か不幸か持ち合わせなかった。そして、その落としどころとしてなのかどうかはわからないが、なぜか、私は主婦について研究するという立場になった。これが良いことなのか悪いことなのかは私にもわからない。

私が主婦について考えるとき、特定のモデ

ルがいるわけではない。誰かに憧れたわけでもない。個別の主婦の特徴的な事例よりも、主婦総体の置かれた強固な状態に惹かれるのだ。主婦には「(一人の女としての)顔がない」、という表現もされる。それはもちろん抑圧を意味するネガティブな表現なのだが、私はむしろ顔がない状態だからこそ「おもしろい」のだと思うし、それこそが主婦の本質なのだから基本的にそうあつて当然だと、まずは思う。そのうえで、各人が、生活や労働や自分のアイデンティティや女としての生について、考えていけばいいと思う。

こんなことを私が書いてどうなるわけでもないのだが、逆にいえば、どうなるわけでもないから私が書けるのだともいえる。ねじれた当事者性への意識があつて、加えて主婦という対象自体が矛盾を内包した存在であるからこそ、私が(自己としても、他者からも)何者か明確に規定できない状態で、主婦について書けているのだと思う。

とにかくいまはその立場のうえで、主婦について、《主婦とおんな》について、考えて、調べて、書いていくしかないと考えている。《主婦性》はずっと付いてくる。

初出・『週刊読書人』2012年6月29日(金)  
第2945号9面《ニュー・エイジ登場378》

## 家政婦は見た？ 近代ナリコ

散歩中みつけた一軒のしもた屋に惹かれ、たびたび回り道をしては確認する。木造二階建ての、どこにでもありそうな商店建築。年月にさらされた白ペンキ塗りの下見板が、砂糖がけのお菓子みたいだなあと、通りすぎざま、なにか気にかかるものがあった、立ち止まったのがさいしよだ。

軒下の植木鉢に花はなく、雑草が芽吹くまじになっていくが、放っておけばじき排気ガスや砂ぼこりが降り積もるだろう幹線道路沿いであつて、汚れることなく整然とならんでいる。店と住居を隔てるガラス障子は閉ざされ、土間は掃き浄められ、あるのは、自転車、赤いポリタンク、塩ビのパイプが挿さったバケツ。奥の棚には、商売道具だろうか、大小の缶や木箱が詰め込まれてあるのがみえる。傍目には脈絡がなさそうでも、どこに何があるかを確実に知る人間がいる、あるいはいたと、棚のモノたちが語りかけてくる、そんな整理整頓ぶりである。

看板ははずされたのか、もたららないのか。なんの商売をしていたのだろう。くわしく様子をおうかがおうとしても、ガラス戸が、近づくと私の姿ばかりを映しだしてしまふ。

不審げにこちらを向いて背後をゆく人と、ガラス越しに目があつてしまふ。よくもこまで磨きあげたものだ。雨粒の跡も、手垢も、拭き筋もないガラス戸は、夜には鍍戸で覆われる。

店じまいしてすいぶん経つようだが、主人がふと奥からあらわれて仕事をはじめそうな気配もする。外観も中身もすっかり古びたこの家の住人の、行き届いた目と手とが、そうさせている。ガラス戸を磨き、植木鉢の汚れを拭い、土間を掃き、棚のほこりを払う。日が暮れば鍍戸を閉め、朝になれば開ける。この家の商売が成り立っていたとき、そうした日々の身ぶりのあとが、こんなふうに眺められることはあつたらうか。

生産性の影になつて見すごされてきたものが、ここでは前景化している。必要以上にみえる家事労働の成果から発散されるなにかは、どこか芸術に似ている。古いしもた屋ではよく、かつてのシヨウウインドウが、植木や盆栽、手づくり品や趣味のコレクションの展示スペースと化しているものだが、その家は建物ぜんたいが、ひとつのコンセプトチュアルアートのようだ。壁に貼られた某政党のポスターの標語の意味も宙に浮いて、この作品の彩りのひとつにみえてしまふ。

日々、家事使用人として働く私は、女性の働きのあるやうな家庭のなかから眺め、考え

がちである。高級住宅地の奥様や、仕事と子供の受験で家事どころではないワーキングマザーや、家業を切り盛りする老舗のおかみさんといった雇い主たちの、内側からしかみえない働きのもとに居続けているせいで、私は、みえなかつたはずのものが露出したしもた屋のありさまに反応した。これも一種の「家政婦は見た！」だろうか。

けれどもそんな、トマソンの見立てだけではとこぼされてしまふものがあるともおもう。うちそとの区別なく、女性の働きのじつさいは、たとえば「芸術」といった、ある名のもとに認知され、制度化された人間の営為のあらゆるものに似ていて、そのどれともおなじではないのだ。それがあつた時、あるきつかけで、私たちの前に立ちはだかる。無視できない問題として、もしくは、そういうことであるよね、とただ流されるものとして。そして、両者のあいだの幅はとつともなくひろい。

〈主婦性〉へ〈主婦的状況〉を生きた女性の歴史を描きだした村上潔さんの仕事に、今日の雇用と労働の問題に接続するものとしての意味や意義を認める一方で、また私はそこから、女性の働きから浮かびあがる、名もなく、制度もされていないさまままを拾いあげ、目に見えなかつたことにすることが、けつして徒勞ではないとおしえられたのだった。

近代以降の社会においては、〈女〉という枠内に割り振られた存在は、社会に捕捉されてしまった時点ですでに〈主婦〉なのです。「自立した女性」というモデル自体が虚構だ、と言ってしまってよいかもしれません。

〈主婦性〉とは、一部の主婦業をする女性たちのみがもつ特性ではありません。〈主婦的状况〉とは、〈女〉総体に課せられる抑圧と、〈女〉をとりまく諸力によって構成される全体状況を指します。

村上潔「著書語る『主婦と労働のもつれ』」(『書標——ほんのしるべ』405号、2012・8)

村上潔さんは著書『主婦と労働のもつれ その争点と運動』(洛北出版、2012)で、これまでさまざまに論じられてきた「主婦」のありようとその「働き」について、主婦である当事者たちが、自分たちを規定するものに向き合い、あるいは乗り越えるために、どのように考え、言葉をつむぎ、行動してきたかの歴史を描きだしています。

私がこれまで、「女性の生活と表現」をテーマに、手芸・料理・読書といった女の活動ジャンルやそれにまつわる本をとりあげてきたのは、当の女性たちが、それをどう受容し、させられ、しなくてはならなかったか、ということへの興味からでした。昨年夏に出した拙著『女子と作文 Girls Write Alone』でも同様です。それはいいかえれば、私たちが「主婦的状况」をどう生きてきたかに目を凝らす、ということだったと思います。本イベントでは、女性の生活と表現の問題を入り口として、主婦の問題についてお話をうかがい、あわせて、この問題について考える糸口となる本を村上さんに紹介していただきます。(近代ナリコ)



■村上 潔(むらかみ・きよし)

1976年、横浜市生まれ。2002年から2005年まで、『remix』誌に映画・音楽に関する記事を寄稿。その後、『音の力<ストリート>占拠編』(インパクト出版会)、『VOL』誌(以文社)などに寄稿。2009年、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。現在、立命館大学産業社会学部非常勤講師。専門は、現代女性思想=運動史。著書に『主婦と労働のもつれ——その争点と運動』(洛北出版、2012年)など。論文に「『三十娘』の利害と「家」の瓦解——資源と威厳の確保をめぐる」(『現代思想』41-12、2013年)など。



■近代ナリコ(こだい・なりこ)

1970年生まれ。ミニコミ誌『modern juice』では、女子の生活と表現をテーマに、手芸、インテリア、お稽古事、料理書等の特集。編著書に、『本と女の子 おもいで1960-1970年代』(河出書房新社)、『ナリコの読書クラブ』(彷徨舎)、『鴨居洋子の世界』(河出書房新社)、『京おんな モダン・ストーリーズ』(PHP研究所)、『女子と作文』(本と雑誌社)等。